

精神分析のはなし 第19話

JAM: 精神分析と政治、ですね。やはりそれについてなにがしか述べないとなりませんね。なぜなら無意識は時を知りませんが、精神分析は知っているからです。スタンダーが「みんなとおなじではない大胆さ」と呼んでいたものを精神分析はあなたに与えますが、今日、みんなはみんなではないことを切望しております。

ラカンは確かにそうですね。彼はみんなのようではありませんでした。みんなのようではない彼の仕方が、ひとに非難されるということが起こります。では彼は、政治については何を語ったのでしょうか？

彼はこの話題について、とりわけ不信を教えていました。政治的領野に撒かれる理想、システム、ユートピアに対する不信です。彼は信じていませんでした。すばらしい街をもつことができるだろうとか、それが過去あったとか、未来にそれが投影されるといった考えを抱いていると思えるようなことばは、一言も、ラカンのなかに見いだすことはできません。

ノスタルジーや希望もありません。ところが政治にかんする大いなる節度は見られません。皮肉からキニク学派にまで至る数々の指摘、嫌みと嘲笑があり、政治は滑稽なものであると同時に、死をもたらすものであることが、強調されています。

ドレスト枢機卿の記録をラカンが読むとき、彼が注意しているのは、枢機卿が語ることです。「政治的出来事のつけを払うのはつねに国民である」。あるいはまた、ラカンは征服者のことを、つねに口に、仕事に、自らのことばを伴ってやってくる者として描いています。労働の疎外は、ラカンにとりひとつの事実です。しかし、じつはそれは集団的反抗を導入しません。なぜならラカンにとり、それは構造の事実であるからで、階級闘争は、搾取するだろう者たちと敵対するべく搾取される者たちを、ただ勇気づけるにすぎないのです。

要は、政治的領野で、ラカンは賛成であるものすべてに対して反対していました。おまけに、政治は諸同一化により行われますが、政治は主の語、イメージを操作し、それによって主体を捕捉しようと努めます。その一方、精神分析、その固有の操作とは逆をいくものであり、主体の同一化にあらがって進み、同一化のひとつひとつをはがし、玉ねぎの皮のようにそれらを剥いで落とすものです。そうやって、主体をその空に還元するのです。

そして同時に、本人にはそうと知られないままその選択や行き先を命令していたシステムから解き放たれることができるのです。ですからこのように見ると、精神分析とは政治の裏側であると、言うことができます。

ところで無意識、これはまたべつのものです。

無意識について、ラカンが好んで「政治と同じものである」と、言っていました。というのは、無意識とは、個人やその閉ざされた語のなかに隠されてるだろう、そして強いることが大切になるだろう、ひとつの実体ではないからです。無意識とは、ある関係において生産される、ひとつの関係もしくはある物です。そしてだからこそある関係においてこそひとはそれに近づくわけです。それは精神分析家との関係ということになります。

そのうえ、あるひとの精神生活において、モデル、対象、支持、障害として、すでに巻き込まれている、だれかほかの人がつねに存在しています。個人心理学とはつねにおよそ社会心理学なのです。

かりに人間が政治的動物であるとすれば、それは人間が語ると同時に他者によって語られるからです。それは無意識の主体であり、それゆえそれはある他者から、世界のなかで取り巻いているディスクールから、その語というものをつねに受け取るのです。それらの語が支配し、主体を表象し、かつ変質させます。

ですから精神分析から、ひとは権力について何事かを学んでいるわけです。それはひとが誰かに対してもつことができる権力について、です。そして権力を押し付けるためにそれは沢山必要なのではなく、本質的に言えば、きちんと選択された語が必要であると分かるでしょう。そして広告が消費のために欠かせない産業になったこともわかります。広告は古くから利用されてきましたし、精神分析のおかげでそこで気づいたこともあります。

民主主義国家にとって政治は・・・、というか、私たちの政治は、広告を経由することがないならば、市民とまだ呼ばれる人たちのほうへもはや向かうことはできません。政治的マーケティングがひとつの技術となりました。たくさんの略号、スローガン、憲章、ちょっとしたフレーズを生みだしていることを確認しなければなりません。そしてオピニオンについての

アンケート、調査、ディスカッションのグループの力を借りて集められたデータに応じて、まず第一に、話されていることをひとが聞きとり、オピニオンに影響を及ぼすことができるような語を抽出することが起こっています。

これらの操作を隠すどころか、ひとが見せつけてくることは驚くべきことです。民衆はそれらの操作が存在していると知っているし、民衆は知りたがり、舞台裏を訪れたいのです。だからその衣装が舞台上に置かれるばかりか、衣装の裏側、少なくとも衣装の裏側のひとつとともに劇が作られているのです。

したがって、政治の実践家たちは、政治はもはや偉大な理想にかかわることではない、むしろちょっとしたフレーズとかかわることであると知る最初の人たちなのです。そして彼らはそのようなことと一緒にやっていきます。また、市民もまたそのようなものであれと願っています。政治がもはや理想化されないことが、民主主義の不幸なのではありません。おそらくそれは運命、ロジックなのであり、こう言ってよければそれが民主主義の欲望です。

ひとは政治の領野における絶対性の凋落をかなり広く確認するに違いありません。それは幸せなことで、狂信の反対にあります。しかしそれが、情熱を失った市民により、利益の理性的討論に道を開くものではありません。それはオピニオンの支配であり、オピニオンについての支配です。そして公的討議は以降無信仰と欺瞞、白状され、同意を得た操作との要素のなかで展開します。それは言うなればゲームの規則です。それを嘆くこともまた、ゲームの一部をなしています。

それは棄却されるべきであると言う人は誰もいません。わずかに呪う人たちがいるくらいです。そのうえひとはそれを能力のなさに還元し、もしひとりが能力をもつことがあれば、ひとはその者がもたらす刺激を称え、その後似たような動きが続くことになるのです。

文明について、・・・その人工的な性質はいたるところで明らかになっておりますが・・・、文明はこの世界であらゆるものを打ち立てています。社会的紐帯、諸信仰、意義のあることなど。精神分析が文明に参加しています。なぜなら文明の見せかけをより強力にぐらつかすことのできるディスクールは、精神分析の他にないからです。

それでは精神分析を実践する者は、論理的に言って、この実践の物質的条件を望まないとな

らないことになります。

まず初めにそれは、国家とは区別される、本来の意味におけるひとつの市民社会の存在です。精神分析は皮肉を作ることが許されないような場には、存在しません。理想を問いに付すことが何の苦しみもなく許されるのではないような場には、存在しません。したがって、精神分析は全体主義タイプの秩序すべてと、大変明確に相いれないものです。労働、民主主義、個人主義の分割が荒らしまくることがなかったなら、精神分析のための場は存在しません。

しかしながら、自由主義が精神分析の政治的条件である、と、言うことはできません。なぜなら、例えばアメリカ合衆国ですが、ラカン派の精神分析がたしかに知識人たちをひきつけるとしても、その実際の実践はそこでどうにか続く程度のことではしかないからです。フロイト自身もまた、精神分析は大西洋を超えると変質してしまったと考えました。移民たちが自分の背後にヨーロッパをあたかも悪い思い出であるかのように置き去りにして、「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」とかつて呼ばれたものの価値に適合しようとするばかりである、と考えました。しかしひとはもうそのようには呼びません。なぜならそれは私たちの毎日にもなっているからです。

それでは、精神分析は、そのものとして革命的であったり、あるいは反動的であったりするのでしょうか？

それはヤヌスです。それは畏というものです。

社会の討論において、ひとはそこからはっきりとした使用法を生み、賛成か反対かを言うものです。そのドクトリンに本当に含まれているもの、それは、精神分析家はそこにおいて精神分析をする、ということです。そして副次的に、精神分析を前進させて世界に広めていく、ということがあります。そしてもし分析家が公の討論やたとえばテレビやラジオにその目的で介入するのならば、それはよいことでしょう。

精神分析は革命的であるのか？ですが、それは絶対にそうではありませんね。政治的次元の変化に希望を位置づけるよりも、精神分析はたしかに不変的なものに価値を置こうとするものです。精神分析は主体の本当により根本的なある次元に作用すると考えます。それは空間—時間の点がメートル的でもないひとつのトポロジー的な関係にあり、もっとも遠くにある

ものが突然もっとも近くに現れる点のことです。

精神分析家とは、ですから「なにも新しいことがない」覚に好んで属していて、それは「それが変化すればするほど、それは同じである」ことを高らかに謳います。それが最悪な場合を除いて、ですが。というのは、その場合それはより良いものであるとひとは思ったからです。

精神分析は革命的ではありません。しかし精神分析は転覆的であり、このふたつは同じことではありません。つまり分析は同一化にさからって進み、理想、主の語にさからって進むということです。おまけに皆さんご存じのことですが、分析中の、あなたに親しいひとがひとり去るのを見るなら、あなたはそのひとがお父さんやお母さん、配偶者や神を称えるのをやめるのではないかと恐れるのです。つまり、ひとは転覆的な精神分析よりも、適応的な精神分析を受けたいと望んでいます。しかしそれは本当には成功しません。

いま、注意を払わないとなりません。それが変化すればするほど、おそらくそれはおなじことですが、しかしそれはやはり変化します。それが同じにとどまるということは、一方であなちは勝ち、もう一方であなちはそれを失うこと、それは解決されないことを意味します。

だからもし精神分析が転覆的であるとしても、精神分析はそれでもやはり進歩主義的なのです。しかしそれは反動的であることを意味していません。

それでは、精神分析は希望がないのでしょうか？

むしろこう言ってみましょう。ひとつの精神分析は、希望によりあなたに作用するのだ、と。それは切除から希望へと進み、そこからなにがしかの安らぎが引き出されます。このことから、精神分析家たちが精神分析の活動家なのではないばかりか—ときおりはそうだとともに、それが必ずしも分析家たちの幸福でもないことが分かります。

しかし、分析家たちはむしろ活動家たちを失望させることができるでしょう。そしてそこから帰結されるのは、彼らは非常に規則的な、自らの操作の結果により時代遅れになった精神分析家たちであることです。その操作があらゆる見せかけ、そしてとりわけあらゆる規範を

ぐらつかせたのです。今現在に至るまで家族と出産の枠に入れ込むことで性的関係を節度のあるものに行っている、あらゆる規範を、です。

そして精神分析家たちは、かつての見せかけが時代の終わりまでちゃんと維持されることを、本当に望んだのでしょうか？

まったくそんなことはありません。

精神分析は伝統においてセンセーショナルな損害を生みました。この損害のうえにやってきたのが、生物学の進歩、生殖補助医療、クローン技術、ひとのゲノムの解析が提供する前代未聞の可能性です。ひとが自分自身遺伝子的に組み替えられた組織となり得るという展望。それはつまり、「父の名」がもはやかつての「父の名」ではないのだと、確認しなければならないということです。